

1968年の夏、グアム島の海岸にテントを張り、友人と二人で寝ていた所、経験したことの無い轟音で飛び起こされた。怪鳥と言われた B52 が頭の上をベトナムへの空爆へ次から次へと飛び立って行くところであった。前日、海岸通りを、リュクを担いで歩いていたところ、大型トレーラーが巨大な爆弾を築地の魚河岸の鮪の競りの如く整然と並べて港から空港へ運んでいるのに数多くで出くわした。その時初めてこの島はベトナム戦争の前線基地だと認識した。ベトナム戦争とは遥かかなたでの戦争としか認識していなかっただけに、驚きの光景であった。その後、携帯電話チップの東南アジア地域での生産のため、近くは中国、台湾から遠くはインド、スリランカまでサブコンを求めて歩き回ったが、ベトナム、カンボディア、には行く機会がなかった。あの小さな国が、物量、パワーと共に巨大な米国と戦い抜いたモーティブフォースは何なのだろうか？中国、ソ連の後ろ盾があったのは分っているが、何かもっと大きな理由があるのでは？・・・と常々考えていた矢先、春日さんから、ベトナム旅行のお誘いがかかり、直ぐに飛びついた。

18日：ハノイ空港に降り立った折、他の東南アジア諸国を訪問した時と異なり、比較的涼しいのにまず驚かされた。次に驚かされたのは、空港から直接、ハノイで最も賑やかな旧市街の中のホテルに連れて行かれたことであった。真っ白なシーツの真ん中に真紅の薔薇の花束。周りを真紅の花びらで囲まれた歓待に、ベトナム人の優しさが感じ取れた。大きなホテルでは味わえないサービスでもあった。バイクの洪水の中を縦横御無人にスイスイと操るシクロの市内観光、お大仁になった気分を味わった。ゴジック様式のハノイ大教会を見るに及んでフランスの植民地時代の面影を残しているのに一抹の悲しみを覚えたが、多くのベトナム人がキリスト教徒と聞いてその気持ちも吹っ飛んだ。タンロン水上人形劇は最も見るのを楽しみにしていた物の一つであった。日本同様の農耕民族であるベトナムの昔の農村生活文化や伝説を題材にした伝統芸術を堪能した。中でも人形は生き物の如く、水上舞台を所狭しと機敏に動き回る人形操作に驚かされた。日本の昔の農村の田植祭りや収穫祭りとオーバーラップして楽しむことができました。更に人形を操る人々は殆ど女性であったのにも驚かされた。ホテルまでの夜道をホアンキエム湖のほとりを歩いたが、湖の真ん中あたりの廟がライトアップされており、静な湖畔であった。



水上人形劇スタッフ

ヒーブご夫妻から歓迎の夕食宴を頂いた。久々に若いご夫婦と子供達から活力を頂き、美味しいベトナム料理を賞味しながらの楽しい会となった。旅行を通して、数多く美味しいベトナム料理を頂いたが、お世辞抜きで本当に美味しいベトナム料理を堪能することが出来た。エビ海鮮、お肉巻、春巻風野菜巻、肉巻、・・・思い出すと今でも涎が出てくる。ベトナム料理にはまりそう！

19日、20日：朝早く湖畔に来たが、柳の下のベンチに腰掛けたお年寄りと思しき人々が静かに湖面を眺めていた。日本ではラジオ体操や太極拳、ジョギングの人々で溢れているのだが。

ハロン湾への国道1号線の車窓から、まず印象に残ったのは日本のODAで建設された幾何学的な美しさのチュンジュオン橋？から見たロンビエン橋、エッフェル塔の設計者が植民地時代に設計したとかで、ベトナム戦争時に中央あたりの橋梁が爆破されたが、復元されぬまま現在も使用されていた。橋梁の構造がエッフェル塔に良く似ていた。1号線の両側はホン川（ホン：紅の意味とか）のデルタ地帯の中央を突っ切っているので広大な農地が広がっていた。街道沿いには多くの工業団地があり、イオングループの巨大なショッピングモールの建築現場を見て、新興国の元気の良さを感じた。余談であるがCanonの工場のすぐ近くにT-電気と看板を掲げた工場があった。よもやと思い帰国後小学校の同級生の経営者にお電話したところ、7年前コスト高の中国の工場を引き払い当地に移ってきたとのことでした。大正解と言っていた。

ハロン湾のクルージング、小林先生と相部屋となった。レトロな電話をいじりながら、不謹慎ではありましたが昼間からウイスキーで乾杯！小林先生、いい香りがするネ！・・・と仰ったが、勧めてもお飲みにならなかった。桂林によく似たハロン湾の奇景、それもそのはずガイドさんの説明では、中国大陸の桂林から繋がる石灰岩山脈の南端とか。アンチョコな知識だが、石灰岩は昔海底で層状に形成され、大陸移動で陸地に押し上げられた。この層が縦型に押し上げられると奇岩、奇島となり、（縦に浸食されるため）、水平になると鍾乳洞が形成され易いとのことでした。この様な説明、無粋ですね！ デッキチェアに横たわって静かに奇島、奇岩の合間を縫う様に進む静かなクルージングは程よい眠気を誘ってくれた。水上生活部落を見て回るアトラクション、水色一色にペインティングされた住居や学校が背景の絶壁とマッチして美しい。船に戻って部屋のデッキからウイスキー片手に夕暮れを楽しんでいると、飲料水や御土産を満載した小舟が近寄ってきた。よく見ると竹で編んだ骨組みに防水シートを張り付けた小舟であった。地産地消が行き届いている。夜中、屋上デッキから50数隻停泊しているのであろうか、漁火の如く輝いていた。食事もアトラクションも問題なし。夜イカ釣りにチャレンジした。一匹泳ぎ去るのを見たが、

一匹も釣れなかった。蓮さんが乗務員に尋ねた所、今まで釣れたのを見たことがないとのことであった。乗船から下船まで若い女性が全てを仕切っていたのが印象的であった。

21日：カンボディアのシェムリアップ空港に夕方7時に着いた。屋根の先端が尖った特徴のあるロビーに向かった。ビザ発給手続きに延々長蛇の列。事前に用意した資料は使われず、またまた記入される羽目になった。サービス精神はゼロに怒りを覚えたがすぐに諦めが変わった。外に出るとまさに南国の気候であった。レストランに直行してカンボディア料理を頂いた。神楽坂のカンボディア料理のレストランで味わった料理と同じように美味しかったが、甘ったるいたれの味には閉口した。各テーブルの前に蓮の花を見事に折りたたんで、全く違う花のような飾りの歓待には驚かされた。またまたホテルでは小林先生と相部屋となった。ベトナム同様にテーブルが無く、小林先生、PCと添い寝の格好でキーボードを叩いていたが5分もしない内に、本当に添い寝となっていた。

アンコールトムに行く道すがら、もっとジャングルの中に遺跡があるものと想像していたが、意外と開けた場所にあり驚きを隠せなかった。堀から南大門に続く橋(?)の両側の多くの仏像に迎えられ、晴れ晴れとした気分となった。回廊外壁はびっしりとレリーフで覆われ、かつてのクメール王朝の栄華を物語っており、何時まで眺めても眺め尽きなかった。中央祭壇の屋上に当遺跡の象徴と言われるバイヨン(4面仏塔)が最も上手く撮れる場所とハンさんに促されて写真を撮りまくった。このバイヨンの右側にあるクメールの微笑とも言われるバイヨンが、日本の観音様の慈悲に満ちた像と相まって印象深く残った。戦争に勝つと勝利の門(凱旋門)、負けると死者の門を潜ったとの説明。何故負けると死者なのか聞き忘れた。ライ王のテラスのレリーフをもっとよく見たかったが、シャッターを切る時間しか与えられなかったのには残念。名残惜しく後ろ髪をひかれる思いでタ・プロム遺跡に急いだ。この遺跡はある王の母の菩提を弔う寺院とか。巨木ガジュマルの根っ子の大蛸が獲物を襲うが如く遺跡に覆いかぶさっていた。最初にテレビでこの光景を見た折、遺跡が木々で破壊されている、何とかしなくては・・・と思ったが、見るに及んで、生と死の調和! そのままで保存すべきと思った。



蓮の花



クメールの微笑



印象のレリーフ

カンボディア旅行のハイライト、アンコールワット、大きな獅子像と欄干の大蛇像に導かれて西門正門を潜った。日本では君子は偉くして南面するとあるが、カンボディアでは神聖な方向は日の出る東と日没の西が神聖な方向？・・・



アンコールワットの外堀にて



王宮のレリーフ

とあらぬことを考えながら経堂を越えて左手の聖池に案内された。絶好の写真スポット？シンメトリーな聖池に映る遺跡と遺跡の姿が美しい。中央寺院の階段の険しいこと、マヤ文明のピラミットの如し。全体が柔らかな砂岩でできているので、細かな細工は美しいが浸食劣化が激し過ぎる。沐浴場の柱に徳川家光時代にここが祇園精舎と誤認して訪れた遣者の落書きがあったが、真っ黒に塗られて判読不可能であった。先端のポーチに座って、西方向南大門方向を眺めていたら、一匹の猿が回廊の屋根から飛び降り、こちらを恐れることもなく、側を通過して寺院の先端壁を乗り越えて行った。バス待ちのトイレ休暇中、警報機が壊れているのか？猛々し音？伊藤先生が蝉ですよ！・・・と教えて頂いた。それにしても大きな連続した鳴き声。姿は見えなかったが恐らく草履程の大きな蝉？アンコールの夕陽を見に行ったバンケン寺丘でも数多く鳴いていた。日没は何れの国も神聖な事ととらえているのか？翌朝、眠い目を擦ってアンコールワットの日の出を見に行った。生憎の曇り空で日の出は拝めなかったが、天気の良いと西湖からダイヤモンド富士を拝むが如く、寺院の先端近くから太陽が顔を見せるとか。それにしても多くのカメラマン、カメラのディスプレイの光がライブのペンライトの如くであった。カメラ撮影を程々にして東聖池に回った。早朝の為か観光客もまばらであった。パンフレットでは見られない写真が取れた。東聖池の周りでは、巨大な樹木が茂っており、氷柱の如く垂れ下がった根っ子？を体に巻き付けて新婚カップルと思しき者が写真を撮り合っていた。早朝にもかかわらず東経堂のベランダに商魂逞しく絹のスカーフの店を広げていた。トンレラップ湖の水上生活村巡り、ハロン湾の海上生活村を見た後だったためか、濁った水、不揃いな家並、異臭に閉口。もっと他の遺跡巡り

に時間を費やせた方がベターと思った。多くの土産物を買う子供達が付きまわってきたが、いずれも笑顔が無く、ある種の悲しみを覚えた。オールドマーケットではカンボディアの現在の生活、文化が良く理解できた。伊藤先生の旅慣れた交渉術にあやかってドライフルーツや香辛料を数多く買い求めた。夕刻、信頼性の低いボンバルディー機に初めて乗り、雨模様のダナンの空港に着いた。

23日、24日：ダナンは、フランス軍が激戦の末敗れ、その後、長くアメリカの前線基地があったとしか記憶がない。その為か、街並みの雰囲気



日本人街に架かる橋

が落ち着いている。朝食後、日本人街に案内された。当時の町の面影は残ってはいないが、唯一、屋根があり、お堂がある木造の橋があった。“来遠橋”の額が掲げられていた。今のベトナム人はこの意味が分からないだろうな・・・と寂しい気持ちになった。仕事の上でアメリカ系ベトナムの技術者、研究者達との交流があった。祖国ベトナムの通貨はドンである。この意味を知っているか？・・・と尋ねる。誰も知らない。そこで、昔々日本はベトナムと朱印船貿易を行っていた。ベトナムから絹や陶器を輸入して、銅（銭）（ドウ）で支払った。この銅銭がベトナム通貨の原点となった、・・・と説明するや否や大信頼を勝ち得た。古都ミーソン（美山）は破壊尽くされた古都であった。昔の面影を取り戻すことは至難の業ではないかと思えた。しかし、何とか早期修復を期待したい。寺院内部の展示物と一緒にベトナム戦争当時の信管を取り去った不発弾があった。一瞬グアムのトレーラーで運ばれていた中の一つではないかと頭を過った。ダナンから古都フエまではガイドさんの粋な計らいで列車の旅を経験した。壊れたシートが修理もされず、また列車のスプリングは伸びきっておりショックが大きい。当初ホーチミンからハノイまで3000kmの乗車を希望したが、如何に無謀な要求であったか、1時間足らずの乗車で納得した。夕食後、ガイドが頻りに飲みに行こうと誘うので蓮さんと出かけた。街中の飲み屋と思いきや漆黒の畑の中？と思われるブラック風？の建物の庭に案内された。10個程のテーブルに薄暗い裸電球が2個、2組の若者達が飲んでいて。一人では恐ろしくて到底来れる所ではないと思えた。ガイドお薦めのエスニック料理が皿に載せられてきた。その大きさとグロテスクさに蓮さん共々絶句！オランダのビール、ハイネケンが美味しかったのか3人で40本近く飲んだとか！

コテージ風の美しいホテルの朝食は、香水川（？）の畔の、熱帯の木々や草花で覆われたレストランの爽やかな庭で食べた。川では漁から帰ってきた漁船や人々で満員の渡船が行き来している長閑な朝であった。ティエンム一寺院（塔？）に向かう船の中から見ると岸部の街並みは車窓から見る景色とは異なつた趣があった。この仏教寺院では釈迦の生誕から、涅槃までの物語が軒の額絵

として並べ掲げられていた。往時の人々の仏への敬虔さが伺える。巨大な盆栽が数多くある庭の前の展示場の一角に、大戦当時、寺院の僧侶が抗議の焼身自殺をした折乗っていった車と英字の記事、写真が展示してあった。英文で人間バーベキューと書いてあったのは悍ましい。(記者は狩猟民族の欧米人?)

長安を模して造られたといわれるフエの王宮、建物やその配置は規模こそ異なるが古都長安(西安)にそっくりであった。奈良の平城京同様に往時の皇帝は長安が理想の都と考えたのだろうか?それともあらゆる面で中国の影響が大きかったと言うべきなのか?王宮パノラマを見ていると、西安のパゴダの頂上から眺めた巨大な古城長安とオーバーラップして、今更ながら往時中国の巨大さ、偉大さ、に驚き見入った。昼食はまたまた豪華なレストランでベトナム王宮料理を堪能した。料理のお皿の盛り付けに、ニンジンやウリを器用に切つての飾りつけ、食べることを忘れて眺め入った。昼食後、フエの山間部にバスで分け入ること1時間、江戸後期時代?の王様の廟を訪れた。建立当時としては珍しく、当時では大変高価なセメント作りの両衛兵像群と獅子像の階段の欄干に守られていた。廟内側の壁や棺はモザイクで彩られていた。色タイルの技術がなかったのか、中国や日本から輸入されたツボを壊してモザイクを作成したとか。日本文字のある欠片も見かけられた。当時の王様の銀のベルトが展示されておりウエスト60cmとあり、周りの衛兵像の高さから想像するに、王様は150cm程の小柄ではないかと推測された。廟は小高い森の斜面に建立されており、廟から眺めた風光明媚な光景に安らぎを覚えた。フエ市内に戻り、ハノイフライトまでの時間潰しにシクロをチャーターしてショッピングセンターに案内してくれた。体育館の様な2階建て建物の中に衣料、食品、雑貨・・・の店がギッシリと詰まっており、通路ですれ違うのもままならない状況であった。秋葉のラジオデパートの如く。

夕刻に、またまた懐かしい?ハノイのバイクの洪水と喧騒の街、活気に溢れた旧市街のホテルに戻ってきた。

25日:ベトナムの典型的な郊外の農村を体験するとのことでダンロン村に向かった。道路、舗装はしているもののバックシートでは時折バウンドで飛び跳ねる程であった。途中に立ち寄った工芸村では、周囲を彫刻で飾った扁額や祭壇を作る観光コース?に案内された。若い職人が荒削りの彫刻にベタベタとラッカーを塗りたくっていた。芸術性は皆無? 神社仏閣を中心に各家々毎に土塀で囲まれた農家の集落、小規模ながら都市国家を形成している。観光客用にオープンにした農家も、大きな縁側と土間、庭の中央に井戸を備えた、古き日本の農家とよく似通っていた。狭い道に、突然牛2頭が現れたのに驚かされた。道端の露天では見慣れた野菜や、生肉が無造作に並べられていた。この村の真ん中にも教会があり、多宗教の混在を容認する民族であったのであろう。村の

寺院の広間では人の好きそうなお年寄りがお茶を振舞ってくれた。庭の石畳には至る所で切干大根作りのためスライス大根が無造作に広げられて、踏んづけそうであった。これも昔の日本の農家の一風景でもあった。村落は広大な畑と灌漑用の池にかこまれており、水牛や牛が草を咩む長閑な風景に心癒された。ハノイに戻る途中、またまたガイドさんが粋な計らいをしてくれた。道路のバス停から、路線バスに乗り換える機会と与えてくれた。現地の乗客から物珍しく眺められた。ハノイに戻ったとある寺院の池畔では子供達が走り回っていた。一緒に写真を撮ろうと声を懸けるとにこにここと笑って気軽に応じてくれた。カンボディアでは経験できなかったことであった。経済、教育の余裕の差か？ベトナムの昔からの名産は絹織物である。シルク街？とおぼしきお土産街の中に、実際に織機で絹織物を生産している工場の見学所があった。シルク土産物店の余興のような存在であった。この自動織機は60cm四方のさん孔坂が繋がれており、この1枚で織物の一つの模様を形成している。これは模様を形成するためのメモリーカードであり、コンピュータの初期、コンピュータにプログラムをインストールするための、さん孔カードや、さん孔テープと原理は全く同様であり、懐かしく、飽きずに眺めていた。昨年博多の城下町で見た博多織も全く同じ織機で織っていた。ここで買い求めたスカーフが娘やかみさんに最も喜ばれた。

夕食後、蓮さんご夫妻とマーケットの探索に出かけた。ガイドブックによれば、36種類からなる業種の職人街とか。残念ながら、金曜と週末のみ夜10時まで店を開けているとのことであった。九時前でありまだ半分ほどの店が開いていた。偶然、ハロン湾船上のイベントで使われた、ニンジンテープ状に切る、紡錘型のカッターを偶然見つけた。間口1間程の小さな店に、大男が二人通路を占拠していた。商売気は全くなく、結局冷やかしたただけで買わず終いであった。湖畔近くのコーヒー豆店で、バスの中で話題になったジャコウ猫のウンチのなかから消化されずに残った豆を焙煎したコーヒーであり、美味で最も高価とか。このコーヒーの入ったプラスチックボトルを指さしながら、騒いでいたら、店中から、このコーヒーを試飲して下さいとお盆に3つカップを乗せて出てきた。3人共顔を見合わせて、“ノーサンキュー”と言って飛び出た。そのお店のすぐ近くに民族楽器店？があった。蓮さんはオカリナがご趣味とかで、グループ演奏時にカスタネットのようなテンポを取る民族楽器を購入したいとのこと。可愛い店員さんに説明をしてもらいながら、値切交渉となった。可愛く、美しい英語を話す店員さん、オーナーに意見を聞いてくると・・・結果は”ノー”。尚も粘る蓮さん、オーナーパパが離れた隙に、“私の一存でOK”となった。蓮さんがウインクしたか？蓮さんの流暢な英語に惚れたか？レストランのアトラクションで4人の民族楽器の演奏があった。ギターを弾いているのは

胡弓のような形をした1弦の楽器。この音色に惚れたのか小林先生がCDを買われた。この楽器店にも同じ楽器が置かれていた。よく見ると民族楽器と言うよりは、ハワイアンで使われるエレキ・スチールギターの1弦楽器、突き出たレバーで弦のテンションを変えてビブラートを出す仕組みである。高校時代の記念祭で作成した思い出の純エレキ楽器、日本人好みの哀愁の音色が出る。

26日：翌朝、埼玉大の留学生であったヒープ准教授の研究室を訪問した。2教室で授業が行われていた。黒板にビッシリと書き込まれた数式と図形から判断して工業数学と材料工学？の授業のようであった。50~60名の生徒で埋め尽くされていて、両教室共女性講師、携帯マイクを用いた大音響の講義風景、教師と若者達の活気を感じられた。日本の大学は？？？校内のポスターに**Perfect Your life with English**が目についた。ヒープ先生からはご専門の土木工学や手がけているプロジェクト、特にハノイの地下鉄と高速道路建設について熱く語ってくれた。ベトナム復興の最前線に立ち、率いてゆく心意気と情熱を感じとれた。ハノイ近郊のタンロンの皇帝城は広大な堀と巨大な正門と背後の広大な広場から想像すると、かなりな規模の城塞ではなかったと想像された。遺されていた小さな寺院からは、敬虔な仏教徒であったことが伺えた。春日夫妻が跨った観光水牛のお姿が背景とよくマッチしていた。アンコールワットでは誰も象には乗らなかったな？タンアンの手漕ぎボートによる洞窟（鍾乳洞？）巡りの湖畔に近づくと多くの水色の制服？を着た女性達が道を横切っていた。後で分かったのであるが、勤めを終えた漕ぎ手の彼女たちが宿舎に帰る所とのことでした。大分夕刻に近づいていたのか、我々がほぼ最終の客のようであった。4人ずつ3隻に分かれて乗舟した。オールがあったので各自、漕ぎ始めた。伊藤先生やガイドさんの舟を追い越そうとすると、何故か船頭が漕ぎ手を緩めて追い越させない。これも後で分かったことだが、我々の船頭がこのグループのリーダー格であり、後ろから、監視、指示をしていたようだ。洞窟内ではわざと頭が鍾乳石や壁にぶつかるようなコースを選んで漕いでいた。危ないと思い手で壁や鍾乳石を押そうとすると“NO”と言って制せられた。サービス精神満点！冷たく透き通った水を通して、水草や大きな魚が手に取る様に見えた。コースの中間点あたりで下舟して、急な坂道を登って訪れた小さな寺院の祠に鳩山前総理の写真が掲げてあった。仕事もせずこのような所で油を売っていたこと、歳費を返せ！・・・と言いたくなかった。再び漕ぎ始めた、ベニスの太鼓橋をゴンドラが潜り抜けるシーンと同じ場面に出くわした。写真を撮ろうと前の舟に大声をかけたが、誰も振り返ってはくれなかった。夕暮れも近づき、薄暗くなり、風も出てきた。向かい風で疲れも出てきたので、漕ぎ手を休めていたら背後から”コゲ！”と檣が飛んできた。バカな日本人観光客が教えたようだ！途中で小林先生や蓮さんご夫妻と議論になったのは、何番目の洞窟？乗舟場所はあの

山の裏手？・・・。全て裏切られる結果となった。マップを持ってなかったのが分からなかったが、どうも 19 ある洞窟を、一筆書きで戻って来たとのことでした。日本では各洞窟に名前を付けるのでこの様な誤解は生じないのだが。10 名程の女性が乗った舟とすれ違い、途中の岸部に向かった。勤めを終えた女性たちが宿舎に帰るところとか。下舟近く、建物背後の大きな湾の周囲岸辺に夥しい程の舟 (100 隻以上) が整然と舟虫の如く岸辺に並べられていた。従業員数百名の一大観光産業会社である。片山さんから、洞窟内から外に向かったお写真の年賀状を頂いた。当時の興奮をまたまた奮い立たせていただいた。若いベトナム兵が休憩していた近くのレストランで昼食をした。店前看板を見て、フエの夜のエスニック料理を思い出し、絶句！

春日さんのご友人の NEC ベトナムの中川さんとの会食はフランス料理店でのフランス料理。フランス植民地時代の名残か、庭テーブルも屋内も何処となくフランス風の趣が漂っていた。店名はラ・トンキン (湾名?) 日本人観光グループも見受けられ、当地では最高級のレストランと思われた。お土産の落ち着いた色合いの古代カエ、メモリチップ入れとして PC 横で目を和ませてくれている。



フランス料理店 LE TONKIN 前にて

27 日：旅行最後の日となった。ハノイ郊外の版画工芸街に向かった。国道から外れると見渡す限りの田園風景となった。高い土手の上を走っている道と思っていたら、ホン河の堤防の上とのことであった。両側のどちらが河であるか分からない程広大な畑であった。堤防の斜面では牛が繋がれて草を食べていた。堤防脇の村落の朝市が終わったばかりの店じまいのバサール裏手に、版画工芸館があった。お年寄りで、日本ひいきの仙台にも来たとかの彫刻家の館長自ら作品を案内してくれた。他のお土産工芸館と異なり、決して無理強いしなかった。展示作品は農耕風景から仏教画・・・と多種多様であった。2 台のバスにカラフルな制服姿の子供達が先生に引率されて入って来た。庭の真ん中には既に彫られた版板とインクとバレンが置かれており、先生が説明を始め出した。

ハノイ最後のハイライト、近郷のバッチャン陶器村ではカラフルな陶器の店々が所狭しと軒を並べており、購買意欲をそそった。現地の方々も来るといふ。価格もリーズナブルに思えた。お目当の薄緑色の陶器は、大きく、高価であったため、新緑色のお皿を 1 枚購入した。7\$ を 4\$ まで値切った。何れのお店の陶器も形が美しく、薄く、形が揃っているのが疑問であったが、後で訪れた陶器工芸館で疑問が解けた。日本の陶磁器の如く、粘土を轆轤や捻で作るのではなく、オランダのデルフト焼と同様、粘土のミルクを作り、吸湿性の素焼き状の型に流し込んで型壁内面に薄く吸着させ、乾燥させて形成する方法であつ

た。この作成方法ですと、複雑な形でも、同じ形の物が ガラス容器の如く薄い焼物を容易に、多量に作ることができる。納得。先程買い求めた同じお皿が25\$との値札。20\$までしますヨ！・・・との店員さんに、丁寧にお断り申し上げた。

ハノイ中心の新築？高層マンション棟群に挟まれた半地下の新築？マーケット。今まで見てきたベトナム風景とはあまりにも不釣り合いの、超高級そうに見えるマーケット。まずどのような人々が来るのか？・・・との疑問が頭に浮かんだ。エスカレーターで下るとクリスマスの電飾に迎えられてた。案の定、店内は閑散としており、キャッシャーも手持無沙汰！しかし希望のランチョンマットが購入できた。市内のタンロン皇帝古城、寺院の境内では、カラフルなアオザイの上にローブを纏い、学生角帽を被った若者が集合写真を撮ったり、帽子を投げ上たり、大騒ぎをしていた。卒業の予行演習？とか。気軽に写真撮影に応じてくれた。寺院の2階ベランダから、古城が一望でき、当時の権勢が偲ば



タンロン王宮寺院の扁額

(何処かの国の国会議事堂の掲げたい)

れた。旅行を通じて、当初の疑問点に対して、何がしかの解決策が見つかったか・・・？と言えば、・・・ムムム・・・！

お土産で一番喜ばれたのはスカーフと竹トンボ (オールドマーケットで10匹1\$)、 “孫に人指し指を上に向けて、目をつむれ、ヨシ！” というまで目を開けるな！” トンボを乗せて “ヨシ！” “ワー！” の歓声！



お土産の竹トンボを喜ぶ孫達

写真を見ながら、当時の楽しかった日々を思い出しながら！

謝辞：我々の希望をかなえて頂き、スケジュール作成に当たってきめ細やかなアレンジにご尽力して頂いた伊藤ゆき先生に深く感謝し致します。